

平成28年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

今年度の重点目標として、①高等部における進路を見据え社会に参加する力を培う学習指導の充実、②児童生徒のボランティア精神の育成、③教員のタブレット端末の活用能力の向上、の取組3項目を挙げた。

重点項目の評価については、「8 学校アクションプラン（様式5）」に記載のとおり、達成度及び具体的な取組状況から総合的に判断して、3項目全ての取組において「達成した」又は「ほぼ達成した」とした。

学校評議員からは、重点項目について「具体的な取組状況から、重点項目はそれぞれの当初の目標を達成している」との評価をもらった。また、各重点項目について「他学部の授業を参観し、意見交換会で授業内容や支援について協議するなど、フィードバックできることは大事である。それが組織の強化につながるよい取組である。」「自分でできたことに「ありがとう」と言われたり、喜ばれたりするという積み重ねは大事である。」「自己肯定感や相手への思いやりは社会に出てからも必要なことである。このような良い取組は、是非何年も続けてもらいたい。」「表出言語がない子や気持ちが伝えられない子が、音声アプリで気持ちを伝えることができる素晴らしい事例である。」「タブレット端末を先進的に使っている学校の取組を調べ、今後に生かしてもらいたい。」など貴重な提言をもらった。

7 次年度へ向けての課題と方策

学校評議員からの提言をうけて、次年度に向けては次の課題について取り組むこととしたい。

- ・ 他学部との意見交換会等を行い、生徒が自分でできたことを振り返り確認するよう導く支援の在り方充実を図る。
- ・ 児童生徒会を中心としたボランティア活動に引き続き取り組み、児童生徒のボランティア精神を育てる。
- ・ ICT活用先進校の事例を研究するとともに校内研修の充実を図り、児童生徒の学習支援等に役立てる。

8 学校アクションプラン

平成28年度 にかわ総合支援学校アクションプラン -1-			
重点項目	学習活動(高等部)		
重点課題	進路を見据え社会に参加する力を培う学習指導の充実		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 高等部では、昨年度は社会に参加する力を身に付けることを目指し、自己決定力を育むため、作業学習において学習内容、支援方法の検討・改善を行ってきた。その結果、教師の支援が減り、生徒が自分で考え判断して活動したり、生徒同士で確認し合ったりする姿がみられるなどの成果があった。しかし、作業学習以外の授業においては、まだ教師の支援が多いのが現状である。各教科の授業においても、生徒が自主的に動けるように授業改善に取り組んでいく必要がある。 昨年度まで、小・中学部の教職員と連携し、作業学習の参観・体験を実施し、高等部段階で見えてくる課題についての情報共有を行ってきた。小・中学部からの積み重ねの支援を引き継ぐことの大切さを確認し、より系統的な支援の必要性を再認識した。今年度も継続して小・中学部との授業参観の機会を設定していきたい。 		
達成目標	「教師のための授業改善ポイント」を活用した授業づくりの実践		授業参観の実施回数
	一人1回以上		一人2回以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 「教師のための授業改善ポイント」を活用して指導案を作成し、意見を出し合い、課題などを整理する。 卒業後の生活と結び付けた視点での目標設定、支援の在り方の共通理解を図る。 		<ul style="list-style-type: none"> 小学部、中学部の授業を参観する。 事後研修で授業の内容、支援について意見交換会をする。
達成度	100%		80%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 高等部教職員全員が「教師のための授業改善ポイント」を活用した授業づくりに取り組んだ。 教科において、教師間で卒業後に目指す姿を踏まえた目標設定、生徒への支援の仕方について話し合いを行うことができた。教科の目標を達成するための効果的なやりとりの機会の設定、教師の支援を減らすための環境の見直しをすることができた。また、個に応じた支援の工夫の必要性が再確認された。 		<ul style="list-style-type: none"> 6月～9月に他学部の算数・数学、体育、音楽、国語の授業を参観した。他学部を2回参観した教職員は80%。8月と12月に他学部との意見交換会を2回実施した。 小・中学部からの学習の積み重ねや身に付けてきたことを引き継ぐ大切さを再確認することができた。また、同じ教科を参観したことで、高等部として卒業後に目指す姿から目標を設定する際、小学部・中学部での学習内容を意識して見直す機会となった。
評 価	A	目標を達成した	B ほぼ達成した
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 他学部の授業を参観し、意見交換会で授業内容や支援について協議するなど、フィードバックできることは大事である。それが組織の強化につながるよい取組である。 		
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 他学部との意見交換会の実施 生徒が自分でできたことを振り返り、確認するよう導く支援の在り方の充実 生徒の自己理解を高めるための支援の継続 		

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

平成28年度 にかわ総合支援学校アクションプラン -2-

重点項目	特別活動(生徒指導部)	
重点課題	児童生徒のボランティア精神の育成	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 本校児童生徒は、素直で明るく活発な児童生徒が多い。反面、自分から進んで行動することは少なく、教師の指示を受けて行動することが多い。また、色々な場面で支援を受けて生活することが多く、そのことが習慣化する傾向がみられる。誰かにしてもらえばかりではなく、「誰かのために」、「社会のために」できることを見付け、一人一人が進んで取り組むことで、ボランティア活動を推進したい。児童生徒に人の役に立つことによる自己肯定感や思いやりの心を育てていきたいと考える。 	
達成目標	児童生徒のボランティア活動実践率	
	2回以上実践した児童生徒70%以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒会を中心として、“小さな親切・ちょっとボランティア運動”の推進を呼びかける。 実践の様子を随時全校に紹介し、ボランティア運動への関心を高める。 定期的にアンケートを行い、実践状況を確認すると共に、教師にも意識付けを図る。 昼休みや放課後に草むしりや校舎内外のごみ拾いなどの活動を計画し、実践の機会を増やす。 	
達成度	100%	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 5月31日(火)の全校集会でボランティア活動について、スライドを使用し児童生徒会長より説明をした。 4月、6月、10月、1月のあいさつ運動期間に、児童生徒会が中心となって“小さな親切・ちょっとボランティア運動”への取組を呼び掛けた。 “小さな親切・ちょっとボランティア運動”ののぼり旗を作り、PR活動に使用した。 第1、2プレイルーム間の掲示板に、児童生徒が実践した内容を、顔写真を入れて掲示した。 10月27日(木)(小学部:10月31日)の昼休みに、全校一斉に校舎外のボランティア清掃を実施し、多くの児童生徒が参加できた。 児童生徒の実践状況に関するアンケートを7月、9月、11月、12月、(2月)の5回実施し、状況の把握と教師への意識付けを図ることができた。 	
評 価	A	目標を達成した
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 自分でできたことに「ありがとう」と言われたり、喜ばれたりするという積み重ねは大事である。 児童生徒にボランティアの意識をもたせることは難しいことだが、誰かが助かっていることを伝え、ボランティア活動のきっかけや機会づくりという点で大切な取組である。 自己肯定感や相手への思いやりは社会に出てからも必要なことである。このような良い取組は、是非何年も続けてもらいたい。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> “小さな親切・ちょっとボランティア運動”の継続 PR活動の工夫 PTA活動、地域活動との連携 	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

平成28年度 にかわ総合支援学校アクションプラン -3-

重点項目	その他(情報図書部)	
重点課題	教員のタブレット端末の活用能力の向上	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・ タブレット端末は、知的障害及び肢体不自由を有する児童生徒にとって、学習だけでなく、コミュニケーションや日常生活の支援に大きな可能性があり、本校でも導入が進んでいる。しかし、使用する教員が固定されていたり、動画撮影等のカメラ機能のみの使用が多かったり、活用に広がりが見られない。 ・ 本校では、タブレット端末7台を全校で調整しながら、主に授業で使用している。そのため、学校生活全体を通して有効な活用場面があると思われるが、常時学級に配置されていないため、試行が難しい現状がある。 	
達成目標	タブレット端末の活用に関する研修の実施回数	タブレット端末を活用した事例報告数
	2回以上	3つ以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・ タブレット端末を使用していない教員に対しては、機器の操作体験を中心とし、使用したことがある教員に対しては、活用事例(アプリ等)の紹介や活用方法についての情報交換を中心とする研修を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事例対象児童生徒の学級に、タブレット端末を常時配置し、学校生活全体を通じて活用可能な環境を設定し、児童生徒の特性に応じた支援について、有効な活用実践を行い、職員全体に報告する場を設ける。
達成度	100%	100%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初級編「タブレットにさわってみよう」では、実際にタブレット端末の操作を少人数で行った。端末の起動から終了の仕方などの基本的な操作から、授業で活用しやすいアプリ操作を学んだ。研修後には、カメラやビデオなどの機能からの活用例がみられた。 ・ 中級編「タブレットを使った実践事例」では、教科等で教材や支援ツールとしてのアプリ活用事例の紹介や簡単な教材の作成演習を行った。 ・ 習熟度に応じた研修を設定したことで、研修後には、教師が使ってみる、教材提示に活用する、紹介されたアプリを活用しての児童生徒への指導等の取組が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ [小学部]発音が不明瞭な児童のコミュニケーション手段としての活用。50音表で文字を入力、音声読み上げ機能で確認により、身近な単語の習得や教師との簡単な会話につながった。 ・ [中学部]手指の細かい操作が難しい生徒の余暇への活用。生徒が可能なタップ操作で好きな画像を選択する他、必要時に教師に援助を求めるなど他者への自主的な働きかけが促された。 ・ [高等部]授業の導入での活用。地図アプリを取り入れ学習の意欲付けを図った。音声等の即時評価機能により、苦手意識が高い生徒も休憩時間に遊び感覚で取り組み、学習定着につながった。 ・ 事例(動画)を校内ネットワークで公開した。 ・ 外部専門家から実践事例やタブレット端末の利活用について助言を受けた。 ・ 教室に常時配置したことで、周囲の学級でも活用しやすく活用効果が広がった。
評 価	A 目標を達成した	A 目標を達成した
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表出言語がない子や気持ちを伝えられない子が、音声アプリで気持ちを伝えることができる素晴らしい事例である。 ・ タブレット端末を先進的に使っている学校の取組を調べ、今後に生かしてもらいたい。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT活用先進校事例の研究 ・ 研修の充実(教員がタブレット端末に触れることを目的とした研修、習熟度別研修など) ・ タブレット端末活用事例の紹介方法の工夫 	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)